

# やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

靈柩車を見ると親指を隠すという呪いは、大正期に靈柩自動車が出現する前から行われていた俗信だった。そうしないと、親が早く亡くなってしまうとか、親の死に目に会えなくなるからと、かつて行ったアンケート調査でも多くの人が回答していた。親指から「親」を連想するからだろうが、それにしてもなぜ親指なのだろうか。

この問題を「しぐさ」の一環として追究していくた国立歴史民俗博物館(千葉県)の常光徹氏は、親指を隠すしぐさには、広い伝承の裾野があると聞いて、病人の家に入る時、夜道を一人で歩く時、犬にほえられた時などに親指を隠したとし、さらに1人でホーキボシ(星)を見たら両親の一人を失うとして、親指を中心とする習俗(大和郡山市)

の事例も紹介していた。災厄を防ぐために親指を隠すというのは、身体のうちで、とりわけ親指が邪悪なモノにつけ込まれやすいことを示しているとして、江戸期の怪異譚もいくつか紹介している。(『しぐさの民俗学』2006年)。

手や足は、人の身体から一番外部に突き出ている部位であり、身体の先端として、指や爪にまで人々の関心が及ぶのだろう。魔物は親指の爪の間から入ると、狐は爪の間から入ると考えられていた。小山田与清が記した江戸期の『松屋筆記』には、「眞俗雜記問答」において、「左大指ノ爪ノ本ト肉トノ間ヲ魂門ト云、右ノ大指彼處魄戸ト云、彼テ大指ヲ握り彼處ヲ隠ス也」とある。左右の親指の爪の間から魂魄(たま

生駒市高山・庄田で使用されていた靈柩車。2003年に名古屋特殊自動車株式会社へ寄贈された(筆者撮影)



## 親指の俗信の行方

しいが出入りするので、人差し指と中指の間に親指を隠すのがいいとされた。親指と爪の間から靈的なものが侵入すると思っていたのだ。手足を使って大地を懸命に耕していった時代、靈的、病的なものが手先足先から入ってくると信じられたのだろう。夜に爪を切ってはいけないという禁忌が語られるのも、夜間に爪を切ると悪いものが入ってくるのではないかという意識の反映かも知れない。

こうして指は防御しなければならない部分と考えられていた半面、ものごとを押さえつける禁圧的な力も發揮すると思われていた。沢田四郎作は著書『山でのこと』を忘れていなかったかで、親指を握る時、

指にまつわるこうした伝承は、身体にまつわる民俗であるとともに、柳田国男が民俗学の対象の一つとした最も微妙な「心意現象」でもある。「心意現象」では、身上に降りかかる禍を避けようと行ってきた俗信による行為は、コロナ感染症の流行で手指消毒による行為は、コロナ神経をすり減らした後、どのような展開を見せるのだろうか。

(奈良民俗文化研究所代表)